

タイトル	ディオニュズ・レーナルドとレオ(ラディスラフ)・ユンゲル - ルブリン県からの脱走者とユダヤ人大量殺戮についての世界への通報 - ... ヤーン・フラヴィンカ
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 70(2): 97-118
発行日	2022-09-30

## 《翻訳》

## ディオニュズ・レーナルドと レオ(ラディスラフ)・ユンゲル

— ルブリン県からの脱走者とユダヤ人大量殺戮についての世界への通報\* —

ヤーン・フラヴィンカ\*\*  
木村和範\*\*\* (訳)

約5万8000人のユダヤ人が、1942年3月25日から10月20日までに、57本の移送列車でスロバキアから強制移送された。フリンカ・スロバキア人民党政権は、いわゆるユダヤ法第22条に基づき労働に服させるために移送する、とユダヤ人に通告した。アウシュヴィッツと[ポーランド総督府]ルブリン県が、スロバキアのユダヤ人を乗せた移送列車の行き先であった。アウシュヴィッツに向かった移送列車が19本であったのにたいして、ナチスは38本の移送列車を仕立てて、スロバキアのユダヤ人3万9899人をルブリ

ン県に強制移送した。その圧倒的大多数が殺害された。ホロコーストで死亡したほとんどのスロバキアのユダヤ人がルブリン県で殺害されたのは、紛れもない事実である<sup>(1)</sup>。

本稿では、A. ヴェツラーとR. ヴルバ、あるいはC. モルドヴィッツとA. ロジンがアウシュヴィッツから脱走した約2年前に、ルブリン県のナチス殺人工場から逃れた二人の男性の物語に焦点を当てる。1942年夏にスロバキアから移送された直後に脱走したこの二人とは、ディオニュズ・レーナルドとレオ(ラディスラフ)・ユンゲルのことである。

D. レーナルドとL. ユンゲルの名前は、ホロコースト史家にとってなじみのない名前ではない。この二人の脱走者については、歴史書でもほんの少しではあるが触れているからである。しかし、彼らの生涯や脱走の状況、そしてスロバキアに到着した後の証言についての詳細な記録は見当たらない<sup>(2)</sup>。

\* “Dionýz Lénard and Leo (Ladislav) Junger - Escapees from the Lublin District and their Effort to Inform the World About the Mass Killing of Jews,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25-26 August 2015)*, pp.39-62. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Institute of History of Slovak Academy of Sciences であり、研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。翻訳出版は原著者の許諾済み。傍点による強調は原著者により、訳文中の [ ] 内は訳者による。

\*\* Ján Hlavinka, Institute of History of Slovak Academy of Sciences

\*\*\* 本学名誉教授

(1) Büchler, Jehošua Róbert. *Deportácie Židov zo Slovenska do oblasti v roku 1942. (Deportation of Jews from Slovakia to the region in 1942.)* In *Acta Judaica Slovaca* 8, (Slovakian Jewish Journal 8,) Bratislava: Slovenské národné múzeum - Múzeum židovskej kultúry, (Slovak National Museum-Museum of Jewish Culture,) pp. 10, 25.

(2) Grundzińska, Marta. *Dionyz Lenárd. Relacja z pobytu w obozie na Majdanku (kwiecień-czerwiec*

D. レーナルドとL. ユンゲルの脱走譚は、ヴェツラーとヴルバの脱走譚やモルドヴィッツとロジンの脱走譚とどこが違って、どこが共通しているのだろうか。また、彼らが脱走後に語った情報はどのようなものだったのか。彼らのその後の運命はどうだったのか。本稿は、これらの疑問に答えようとしている。

まず、根本的な違いは、D. レーナルドとL. ユンゲルの事件が2つの別々の脱走だということである。ジリナ [ブラチスラバの北東約150<sup>km</sup>、サビノフの西約220<sup>km</sup>] 生まれのD. レーナルドは、1942年3月にスロバキアからルブリン県のマイダネク強制収容所に移送された。これにたいして、サビノフ生まれのL. ユンゲルは1942年5月に移送されたが、その行き先はルブリンではなく、ルブリン県のゲッターの一つがあったレヨヴィエツであった。とは言うものの、ここではまず、二人の脱走譚の共通項(1942年にD. レーナルドとL. ユンゲルが強制移送された地域、ならびにスロバキアからの移送列車が到着したときの状況)に目を向けることにしよう。二人が移送されたのはルブリン県である。ナチスは占領下のポーランドの一部を総督府と名付け、それを5つの行政区に区割りした。ルブリン県はその一つである<sup>(3)</sup>。ナチスは総

督府の全地域を「東部領土」とみなして、ユダヤ人を大量殺戮する場とした。

スロバキアのユダヤ人の強制移送が始まった1942年3月に、ナチスは総督府で「ラインハルト作戦」に着手した。ルブリンに司令部を置くこの作戦の目的は、総督府の領域内に居住するすべてのユダヤ人の肉体をすっかり消し去ることであった<sup>(4)</sup>。域内のユダヤ人と外国から連行してきたユダヤ人の大量殺戮は、そのために特別に建設されたベウジェツ、ソビボール、トレブリンカの絶滅収容所で行われることになっていた。1942年3月、スロバキアからユダヤ人の移送列車がルブリン県に到着し始めたときには、まだ絶滅収容所は完成しておらず、ベウジェツ収容所だけが作戦の目的に叶っていた。ソビボール収容所に至っては、ガス殺の開始は1942年5月である<sup>(5)</sup>。

計画では、まずポーランドのユダヤ人を殺害し、次に他国から連れてきたユダヤ人は仮設のゲッターや労働収容所に暫定的に収容して、後で殺害することにした<sup>(6)</sup>。

スロバキアからの「労働に適した」男性を乗せた最初の移送列車の行き先は、マイダネク収容所であった。スロバキアから最初のいわゆる家族移送があった1942年4月11日ころから、ユダヤ人は、ルブリンで選別されるか、あるいは場合によっては選別されずに、レヨヴィエツ、コニユシコヴォラ、ナレツォフのいわゆる通過ゲッター、もしくは直

1942 roku). (Dionyz Lenárd. An Account of his Stay in the Majdanek camp (April-June 1942). In *Zeszyty Majdanka*, 2014, roč. XXVI, (Majdanek Journals, Vol. XXVI), pp. 181-250; Fatranová, Gila. *Boj o prežitie*. (The Fight for Survival.) Bratislava: SNM-Múzeum židovskej kultúry, (SNM-Museum of Jewish Culture,) 2007, s. 56.

(3) 総督府は、1939年10月にナチスが占領下のポーランドの領土に作った行政地域単位である。初めは4つの県(クラクフ県、ワルシャワ県、ルブリン県、ラドム県)に分割され、さらに各県の内部が細分された。クラクフは総督府の行政の中心地であった。ソビエト連邦への侵攻後、東ガリシアが5番目の県として総督府に加えられ [ガリシア県]、ハンス・フランクが総督を務めた。[http://www.yadvashem.org/odot\\_pdf/Microsoft%20](http://www.yadvashem.org/odot_pdf/Microsoft%20)

Word%20-%206246.pdf)を参照。

(4) Kranz, Tomasz. *Extermination of Jews at the Majdanek...*, p. 127.

(5) Kuwałek, Robert. *Obóz zagłady w Bełżcu*. (Death camp in Bełżec.) Lublin: Państwowe Muzeum na Majdanku (State Museum at Majdanek), 2010, p. 125. ソビボール絶滅収容所については、Schelvis, Jules. *Sobibor. A History of a Nazi Death Camp*. Oxford and New York: Berg, 2007を参照。

(6) Kranz, Tomasz. *Extermination of Jews at the Majdanek...*, p. 15.

接ソビボールに移送された<sup>(7)</sup>。

### ディオニュズ・レーナルド

さて、ここでディオニュズ・レーナルドを取り上げることにしよう。彼の人生は、1912年9月23日にブダペストで始まった。父アドルフ・レーナルドはスロバキア人、母テレザはハンガリー人である。第一次世界大戦後、レーナルド家はジリナに移住し、第二子である娘クララが生まれた。当初、一家はジリナで比較的順調な生活を送っていた。D.レーナルドの父は店舗の窓の清掃で生計を立てていたが、その後の経済恐慌で一家は存亡の危機に瀕した<sup>(8)</sup>。

ディオニュズは、家でも友達からもダニエルと呼ばれていた。体軀は小柄で細身であった。教育は、ジリナの小学校を卒業し、公立学校に4年間通学して卒業した。それ以外の正式な教育は受けていないが、文学に関心を抱き、読書に情熱を捧げ、音楽と詩を愛好していたために、視野はかなり広く、とくに美術と詩にかんしては創作を試みてもいる<sup>(9)</sup>。

ディオニュズは歌手になりたかったが、その夢を果たすことはできず、レストランで仕事を覚えながらウェ이터として、あるいは倉庫番として生計を立てていた。

レーナルド家はシオニスト運動を支持し、すでに1930年代には当時のパレスチナに移住したいと考えていた。D.レーナルドと妹は、左翼シオニスト青年組織ハシヨメル・ハツァイルのメンバーであった。1933年、D.レーナルドはチェコスロバキアからパレスチナに不法移住し、テルアビブでもウェ이터として働いた。その1年後の1934年、両親と妹がD.レーナルドの後を追ってきたが、全員、イギリスの官憲に拘束され、不法移民としてチェコスロバキアに送還された<sup>(10)</sup>。D.レーナルドの同時代人の回想によれば、D.レーナルドは1937年の夏、プラハで詩人や芸術家と出会い、自作の詩について議論した。詩集を出版しようとさえしていたとのことである<sup>(11)</sup>。

1939年3月にスロバキア国が樹立された直後、D.レーナルドの妹クララ(家庭ではラケルと呼ばれていた)は、若いシオニストの助けを借りてデンマークに渡り、後にそこからスウェーデンに渡った。ディオニュズはスロバキアに残ったが、自分もいつかは移住したいと願っていた。ユダヤ人排斥が狂乱の頂点に達したその後の数年間の彼の運命は、あまり知られていない。ただし、ジリナの若

(7) Grundzińska, Marta. Żydzi słowaccy w obozie koncentracyjnym na Majdanku. (Slovak Jews in the Concentration Camp at Majdanek.) In *Studia Żidowskie Almanach* (Zidovsk Almanac Studies), 2014, Vol. IV, No. 4, p. 56 を参照。

(8) Memoirs of Rakhel Anshel, the sister of D. Lénard, manuscript. Personal archive of Orly Anshel Peled. 詳しくは Hlavinka, Ján. “Dójsť silou-mocou na Slovensko a informovať...”: (“To Reach Slovakia by Force and Inform...”) *Dionýz Lénard a jeho útek z koncentračného tábora Majdanek*. (Dionýz Lénard and his Escape from Concentration Camp Majdanek.) Bratislava: VEDA, 2015 を参照。

(9) D.レーナルドの証言録の中には、見識の広さをうかがわせる覚書やたとえ話が書かれている。このため、歴史学者の中にはD.レーナルドが高い教養をもっていたと結論づける人もいる。Memoirs of Rakhel Anshel; Štátny archív v Bratislave (ŠA Bratislava), f. Krajský súd v Bratislave (KS v Bratislave), Tk VI 238/1943 (Memoirs of Rakhel Anshel; State Archive in Bratislava (SA Bratislava),

f. Regional Court in Bratislava (KS in Bratislava)), Dionýz Lénard, record of 8 February 1943; Grundzińska, Marta. *Dionyz Lenárd. Relacja z pobytu w obozie na Majdanku (kwiecień-czerwiec 1942 roku)*. (Dionyz Lenárd. An Account of his Stay in the Camp Majdanek (April-June 1942). In *Zeszyty Majdanka*, (Majdanek Journal,) 2014, Vol. XXVI, pp. 181-250.

(10) Memoirs of Rakhel Anshel, manuscript. Personal Archive of Orly Anshel Peled.

(11) Bednár, Štefan. *Bohém hľadá vlast' II.* (A Bohemian Looking for Homeland II.) Bratislava: Slovenský spisovateľ, 1984, pp. 38-39.

いシオニストたちと一緒にあって D. レーナルドは移住の準備を進め、ブレズノ・ナド・フロノム [ブラチスラバの北東約 250<sup>km</sup>] など東スロバキアにある即席の「キブツ」で数ヶ月を過ごしたことが知られている。しかし、彼も友人たちも「アーリヤー (aliyah)」 [イスラエルへのユダヤ人の移住] を実現し、ユダヤ人の祖国を建設するという夢を叶えることはできなかった<sup>(12)</sup>。この原因は、一つには国内の政治的状況であり、二つにはイギリス当局によるスロバキアのユダヤ人にたいする移民の承認件数が少なかったことである<sup>(13)</sup>。スロバキアにおける急進的なアーリヤー運動の時代に貧困化した家族の絶望的な経済状況を目の当たりにしたからであろうか、1941年7月、パレスチナ行きが果たせなかったことに失望した D. レーナルドは、スヴェトイ・クリーズ・ナド・フロノム (現 ジャル・ナド・フロノム) [ブラチスラバの北東約 165<sup>km</sup>] にあるユダヤ人労働センターに志願し、フリンカ兵の監督の下で、道路建設にかんする様々な肉体労働に従事したり厨房を手伝ったりした<sup>(14)</sup>。

(12) 若いシオニストたちは、自分たちの共同体をヘブライ語で「ブラガ」(単位の謂)と呼んだ。ディオニュズは、ブレズノのブラガでマスキール(秘書)という役職に就いていたと言われている。しかし、それは決して肩書きから想像されるような楽なものではなかった。実際に記録をとりながら、1日9時間、工事現場で汗を流して働いた。ブラガのメンバーは皆、共通の箱にお金を入れていた。1939年から1940年にかけての D. レーナルドの運命と、パレスチナへの出発準備については、彼がデンマークにいる妹に宛てた手紙から知ることができる。D. Lénard's letters of 2 August, 6 October, 9 December, 6 August, 21 August and 6 October 1940. Personal archive of Orly Anshel Peled.

(13) Fatranová, G.. *Boj o prežitie.*, (The Fight for Survival..) p. 56 を見よ。

(14) 労働センターでは、道路網を建設していたジリナのテクニカ社の下で、ユダヤ人が建設工事のために肉体労働をしていた。ŠA Bratislava, f. KS v

1941年から1942年にかけての冬季は建設工事が中断されたが、D. レーナルドはスヴェトイ・クリーズ・ナド・フロノムに留まった。1942年の年が明けるとただちに、同じ年ごろの人たちと同様に、D. レーナルドは人生の計画を立て、現下の状況にもかかわらず、婚約し結婚することにした。このスヴェトイ・クリーズ・ナド・フロノムは工事現場だと言われていたものの、実は強制移送されるユダヤ人をかき集めるための場所であったことを、後に彼は知ることになった。やがて、自分もこの移送措置の対象になっていることが判明した。D. レーナルドが後に回想しているように、ユダヤ人センターの幹部から回覧板を見せられたが、そこには季節労働のために出発する旨が記載されていたからである<sup>(15)</sup>。

D. レーナルドはクレムニツァ [スヴェトイ・クリーズ・ナド・フロノムの北約 18<sup>km</sup>] を通ってノヴァーキー [クレムニツァの西約 40<sup>km</sup>] の収容センターまで護送され、そこから移送列車に乗せられることになった。フリンカ兵が到着したユダヤ人をとても残酷に扱っているのを見て、ノヴァーキーの収容所にいたドイツ人顧問官(親衛隊将校)の言葉を思い知ることになった。移送列車に乗る前に、ユダヤ人は貴重品を手放さなければならなかった。国境を越えた後に貴重品を携行していることが発覚すると、親衛隊員によってただちに射殺されたのである<sup>(16)</sup>。

ルブリンへの移送は、家畜輸送用の貨車に乗った凄まじい状況の下で行われ、到着後は残忍極まりないやり方で警護されて、世にマイダネク強制収容所と言われる郊外の収容所に連行された<sup>(17)</sup>。1942年3月以降、マイダ

Bratislave, TkVI 238/1943, Testimony of Jozef Tatár.

(15) Moreshet Archive (MA), Givat Chaviva, A. 1564. Testimony of D. Lénard.

(16) Ibid.

ネク収容所はラインハルト作戦の中に入っていた。ユダヤ人囚人はこの収容所を建設しただけではない。そこは、この作戦によって絶滅収容所で殺害されたユダヤ人の私物を分類するのに必要な労働力を提供する場でもあった。ポーランドの歴史学者トマシュ・克蘭ツが書いているように、1942年の春以降、マイダネクには「『ユダヤ人問題の最終解決』と労働力不足の問題にたいするユダヤ人の強制労働による解決という二つの（どう考えても矛盾する）目標を調和させようとするヒムラーの苦肉の策が投影されていた。」<sup>(18)</sup>

D. レーナルドはマイダネク収容所で何を体験し、何を見たのだろうか。最初の2日間は水が与えられなかった。このとき、彼をはじめとする移送中の収容者は、看守からコップ一杯の水とスーツ（後になると金時計）を交換しないかと持ちかけられた。後に証言したように、そのときD. レーナルドはあの場にいた人間の命の価値とは何かと自問した。彼の証言は続く。「そのときはまだ、このすべてが序曲にすぎず、現実はまだもっと残酷であることを知りませんでした。」<sup>(19)</sup> それから数週間、D. レーナルドはマイダネク収容所で地獄の日々を過ごした。スロバキア、ボヘミア・モラヴィア保護領、ポーランド総督府からの何千人ものユダヤ人男性が数少ないバラックに詰め込まれた。ドイツ人の刑法犯やソ連軍捕虜と一緒にされたのである。ウクライナ人看守とリトアニア人警察官<sup>(20)</sup>を手下に、

親衛隊は残酷な体制を敷いた。

収容所を建設したのは、囚人の作業部隊である。収容所はまだまったく完成していなかったからであった。そのために必要な作業は、[収容所内の] 過酷な肉体労働によるか、収容所外での監視付きの奴隷労働によって行なわれた。これらはすべて、絶え間ない殴打と殺戮を伴った。配給される食料はといえば、食料というよりは水っぽいスープで、それが原因となって衰弱させ病気を引き起こした。マイダネク収容所では、多くの収容者が伝染病に罹り、シラミに悩まされた<sup>(21)</sup>。

収容所からの脱出後に書面にした証言の中で、D. レーナルドは囚人の立場と命の価値に触れて、「どんな動物でも我々より価値があったと思う。」<sup>(22)</sup>と書いている。彼は、毎日多数が死んでいったと述べ、「過労による若死にを自然死と呼ぶことができるならば、死者の半分は自然死である。……残りの半分は非業の最期を遂げた。」と付け加えている<sup>(23)</sup>。D. レーナルドは、スロバキアのユダヤ人がぬかるみに足を取られて転ぶときに、うっかり親衛隊員の制服に触れて、その場で射殺されるのをその目で見た。彼は、生のジャガイモを盗んだ若い囚人が即座に射殺されるのを見た<sup>(24)</sup>。彼は、ニトラ出身のスロバキアのユダヤ人が金網のフェンスに近づくと、射殺されてしまったのを見た<sup>(25)</sup>。彼は、

はマイダネク強制収容所であった。この隊員がマイダネクに配置されたのは1941年11月である。収容所が存在する間、漸次増員され、リトアニア警察の2個大隊が配備されるまでになった。Bubnys, Arunas. Bataliony policji litewskiej w Lublinie (1941-1944) (Lithuanian Police Battalions in Lublin (1941-1944)). In *Zeszyty Majdanek*, (Majdanek Journal,) 2011, roč. (Vol.) XXV, pp.115-128.

(21) MA, A. 1564. Testimony of D. Lénard.

(22) Ibid.

(23) Ibid.

(24) Ibid.

(25) Ibid.

(17) Ibid.

(18) Kranz, Tomasz. Eksterminacja Żydów na Majdanku i rola obozu w realizacji “Akcji Reinhardt” (Extermination of Jews at Majdanek and the Camp’s Role in Carrying out “Operation Reinhardt”), In *Zeszyty Majdanek*, (Majdanek Journals,) 2003, Vol. XXII, p. 16.

(19) MA, A. 1564. Testimony of D. Lénard.

(20) これは、ドイツ軍のソ連侵攻後、ナチスがリトアニア兵で編制したりトアニア警察第2大隊のことである。D. レーナルドが収監されていたころ、この大隊には370人の隊員がいて、配置部署

収容所に移送されたルブリン出身のユダヤ人とも話をした。彼は最初の数週間のうちに、ありとあらゆる犯罪を目撃したのである。

D. レーナルドが収監されていたころ、マイダネク強制収容所にはまだガス室は建設されていなかった。この収容所がガスによるユダヤ人の大量殺戮のもう一つの中心地となったのは、D. レーナルドが脱走した後の1942年秋になってからのことである。1942年8月と9月に、収容所施設が最初のガス室のために改築され<sup>(26)</sup>、ガス室行きのユダヤ人囚人が選別されたのは、知られる限り1942年11月9日である<sup>(27)</sup>。その後、数ヶ月で、数万人のユダヤ人がマイダネクのガス室で殺害された<sup>(28)</sup>。したがって、D. レーナルドは、1944年にアウシュヴィッツから逃亡したA.

ヴェツラー、R. ヴルバ、あるいはC. モルドヴィッツとA. ロジンは異なって、マイダネクでのユダヤ人の大量ガス殺は目撃していない。

しかし、D. レーナルドの証言から明らかのように、マイダネク強制収容所で生き延びることはできないと彼は考えていた。ヴルトキー出身の仲間の囚人ティボル・シュナイダーが、「君は愛する人にまた会えると思うか、二人は生還できると思うか。」と尋ねたとき、D. レーナルドの答えは、「質問に答えるのは難しいが、このペースで行けば、たとえ射殺されなくても、二人が生き残ることはないだろう。……ルブリンから来た5万人のユダヤ人のうち、生き残っているのは3000人しかいない。このことを見れば、すべては幻想だ。あいつらが、皆の中から我々二人だけを助けるとでも思っているのか。」というものであったとのことである<sup>(29)</sup>。

D. レーナルドは、いかなる犠牲を払ってでもマイダネクから脱出しようと決心した。彼の証言によると、自分の命を守ろうとしたことや、両親と婚約者のことを考えたほかに、脱出を決意させたものがあつた。彼が書いているように、それは、「うち続くこの大惨事を阻止する力を持っている人たちに影響を及ぼしたい、あらん限りの力を振り絞ってスロバキアに辿り着き、故郷に残っているユダヤ人やそれ以外の地にいるユダヤ人に、世界史上最大の欺瞞を知らせてやりたい。」<sup>(30)</sup>という意欲であつた。

当初、D. レーナルドは二人の囚人（ストラッサーとシュレジンガー、いずれもスロバキア人）と脱走を計画していたが、決定的なときには一人だけになった。1942年6月初旬のある晩（正確な日付は不明）、彼は建築

(26) Kranz, T. *Extermination of Jews at the Majdanek...*, pp. 45-46.

(27) *Ibid.*, pp. 48.

(28) 1943年11月、ナチスは「収穫祭」作戦により、マイダネク収容所でまだ生きていたユダヤ人のほとんどを殺害した<sup>(訳注)</sup>。Kranz, Tomasz. *Extermination of Jews at the Majdanek...*, pp. 67-69.

(訳注)

[[「収穫祭」作戦は1943年11月3日の夜明けに始まった。親衛隊と警察隊がトラウニキとポニアトヴァの労働収容所を包囲した。ユダヤ人が集団で収容所から連行され、殺害のために掘った近くの穴で銃殺された。マイダネクでは、ナチス当局がまずユダヤ人とその他の囚人を分け、ユダヤ人を近くの穴まで歩かせて、銃殺した。ルブリン県の他の労働収容所のユダヤ人も、射殺するためにマイダネクに移送された。マイダネクとトラウニキの二つの収容所では、大量射殺の音をかき消し、犠牲者の悲鳴を隠すために、拡声器から音楽を流した。マイダネクとトラウニキの殺戮作戦は1日で完了した。2日間に亘るポニアトヴァでの殺戮は、11月4日に終了した。[改行]「収穫祭」作戦は、ドイツによるホロコースト最大の虐殺で、約4万2000人のユダヤ人が殺害された。」「Operation “Harvest Festival”, by the United States Holocaust Memorial Museum, <https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/aktion-erntefest-operation-harvest-festival>, accessed on June 1, 2022.]

(29) Moreshet Archive Givat Haviva, A. 1564. Testimony of D. Lénard.

(30) *Ibid.*

資材置き場となっていた収容所の第4区に身を潜めた。匍匐して柵を越えたのは、暗くなってからである。食料はわずかだったので、すぐに地元のポーランド人に助けを求めなければならなかった。何人かのポーランド人が助けてくれた。逃避行の詳細は、彼の証言の中に書かれていたが、保存されていないために、完全に再現できない。いずれにせよ、D. レーナルドは、1942年7月某日スロバキアに到着している<sup>(31)</sup>。家に戻ったが、両親はいなかった。1942年4月29日、両親はアウシュヴィッツに強制移送され、二人ともそこで殺害されていたからである<sup>(32)</sup>。婚約者もスロバキアにはいなかった。

最近まで、歴史学者は、スロバキア帰国後のD. レーナルドの運命については、ほとんど情報を手にすることができなかった。D. レーナルドは、偽名で署名した日付のはっきりしない証言の主であり、その証言をまとめてからハンガリーに逃れ、そこで彼の足跡がぷつぷつと途絶えている。このことは確実に考えられてきた。ところが、ユダヤ人センターの元職員サムエル・ドヴォリーン(ホフマン)は、D. レーナルドが証言を執筆したことは間違いないと言っている。脱走後のD. レーナルドに個人的に会ったことがあるドヴォリーン(ホフマン)は、1968年に歴史学者ラディスラフ・リプシャーにD. レーナルドの運命の一端を説明している。ドヴォリーン(ホフマン)によると、D. レーナルドはマイダネクから到着後、収容所仲間の父親で医師をしていた人と一緒にバンスカ・ピストリツァ[ブラチスラバの北東約210<sup>km</sup>]で身を隠し、その後ブラチスラバの「ブリタス」社で住込み掃除夫として働いていたが、そのとき誰かに通報されたとのことである。ドヴォリーン(ホフマン)がD.

レーナルドと面会したのは、ブラチスラバのゲーリング通りにあるユダヤ人強制収容センターであったが、D. レーナルドがそこに収監されたのは、そのためとされている<sup>(33)</sup>。ドヴォリーン(ホフマン)によれば、D. レーナルドとの面会は「おそらく1944年4月」に行われたとのことである。さらに、D. レーナルドは証言をとりまとめた後、ハンガリーに逃亡したともドヴォリーン(ホフマン)は言っている<sup>(34)</sup>。

歴史学者が入手できる資料はこの他にもある。それは、1944年8月11日にD. レーナルドがスウェーデンの妹に宛てた一通の手紙であって、年代記的に言えば、それは彼がその運命を伝えた最後の文書である。この資料から、レーナルド家の人々でさえ、D. レーナルドはハンガリーのユダヤ人と一緒に、おそらくアウシュヴィッツ収容所でナチスに殺されたのだろうと考えていた<sup>(35)</sup>。

私の研究によれば、これは事実ではない。スロバキアに逃れた後のD. レーナルドの運命には、もう少し光を当てることができる。ドヴォリーン(ホフマン)の情報を元にして、私が発見したところによれば、D. レーナルドは、ルブリンから脱走後、バンスカ・ピストリツァに潜伏していた。1942年夏、彼はモーリツ・マルクステインとかいうユダヤ人から、個人情報にかんする偽造文書(市民権証明書)を入手した。この文書は、ミク

(33) ドヴォリーン(ホフマン)は、D. レーナルドがマイダネクに戻り、その医師の息子に脱走を説得しようとしたが、その息子が怖じ気づいて断ったので、D. レーナルドは再び逃亡したとも言っている。しかし、他の歴史学者と同様に私も、この話は正確さに欠けているばかりか、あり得ないとも考えている。Cf. Grundzińska, Marta. *Dionyz Lenárd...*

(34) MA, A. 1564. Record of the interview with Samuel Dvorin by Ladislav Lipscher (1968).

(35) Letter by D. Lénard of 11 August 1944. Personal archive of Rakhel Anshel.

(31) Ibid.

(32) SNA, MV, box 227, file 23.



ラーシュ・プルジンスキーの名で発行されていた。当時の財務大臣の名入りの偽造文書を手に入れたD. レーナルドはブラチスラバに移り、「部屋と窓の清掃業 ミハル・レントウライ社」の仕事にありつくことができた。1942年11月、D. レーナルドは雇用主を明記した勤労者社会保険登録票を取得し、警察署に届け出てブラチスラバで様々なホテルを渡り歩いた。

1943年1月頃、D. レーナルドはブラチスラバで、1937年にプラハで知り合った旧友でアカデミック美術の画家シュテファン・ベドナルと再会した(当時、ベドナルは共産主義レジスタンスの一員でもあった)。ベドナルの回想によれば、マイダネクから逃れたことをD. レーナルドは打ち明け、その様子を語ったとのことである。ベドナルは、ジリナにはまだユダヤ人が例外的に住んでいることをD. レーナルドに話した。そのとき、ユダヤ人に体験したことを知らせたかと尋ねると、D. レーナルドは、「ああ、そのような人たちは住んでいるよ。彼らを訪ねてみた。私の話を聞いてはくれたが、追い出されたよ。」と言ったとされている<sup>(36)</sup>。ベドナルによると、このユダヤ人たちはD. レーナルドがユダヤ人センターに通報したかどうかを話題にしたとのことである。D. レーナルドは、ブラチスラバのユダヤ人センターに行ってみたが、聞く耳を持たなかったので、「自分にできる最善のことは、すぐに姿を消すことだと思った。」と述べているとされている<sup>(37)</sup>。

ベドナルによれば、自分が勧めたから、D. レーナルドはマイダネクでの体験談を執筆することにしたとのことであった。D.

レーナルドが書き残した証言について、ベドナルは、「18頁に亘るその手稿は、びっしりとカリグラフィの書法で書かれていたことを覚えている。」と書いている。ベドナルの回想によれば、ベドナルがエロ・シャンドルに渡した証言書は、ベドナルがタイプ打ちした写本ではなくて、現物そのものであったと言われている。シャンドルはそれを海外のレジスタンス(とくにトルコ経由で「政治亡命してロンドンにいるチェコスロバキア共産党」)に送ることを確約したとされている。ベドナルとD. レーナルドはその後も会うことになっていたのだが、ある日を境にしてD. レーナルドは姿を見せなくなった<sup>(38)</sup>。

私が調べたところによれば、D. レーナルドは1943年2月7日にブラチスラバのホテル・ルドルフで逮捕され、身柄を拘束されて、その運命は風前のともし火だった。虚偽の国籍を供述したM. マルクステインが、ミクラーシュ・プルジンスキーの名前を語って発行された偽造書類を使用して詐欺を重ねたからであった。その結果、捜査が命じられ、ブラチスラバの警察はホテルの宿泊名簿を調べて、マルクステインがホテル・ルドルフを根城にしていると踏んだのだった<sup>(39)</sup>。

拘留されたD. レーナルドは、すぐに警察に本当の身分を明かし、偽造書類の使用を進んで認め、マルクステインと知り合いであることまでも認めた。だが、彼は強制移送の前に逃亡したユダヤ人を装った。始めはスヴェトイ・クリーズ・ナド・フロノムで働いていたが、スロバキアから強制移送されることになったために、身分を偽り隠れていたと供述した。警察官も検察官も、そして仕舞いには

(36) Bednár, Š. *Bohém hládá vlast II.* (A Bohemian Looking for Homeland II.) pp. 40-41. [傍点による強調は原執筆者による。以下同じ。]

(37) Ibid., p. 41.

(38) Ibid. p. 42.

(39) *Slovák*, 12 January 1943, p. 5; ŠA Bratislava, f. KS v Bratislave, TK VI 238/1943, Official record of 7 February 1943.

判事までもが、D. レーナルドの供述を内務省第14局の記録と照合することはなかった。調べてみれば、D. レーナルドはすでにスロバキアから強制移送されていること、したがって総督府から逃亡したユダヤ人であることが発覚したであろう。1943年5月17日、ブラチスラバでD. レーナルドに判決が下され、禁固3月と(ユダヤ人であるD. レーナルドには選挙権がなかったのだが)選挙権を剥奪された。拘留期間が算入されたため、彼は判決当日に(着の身、着のままで)釈放された<sup>(40)</sup>。ただちに国家保安本部に送致されたが、D. レーナルドの事案は管轄外と判断され、身柄が警察本署に移送された。警察本署はD. レーナルドを警察が所管するゲーリング通りのユダヤ人強制収容センターに設置された刑務所に収監した。

ドヴォリーン(ホフマン)の証言からも分かるように、このセンターは、ユダヤ人センター社会部の要請で1942年8月に設立され、拘留所から釈放された者や刑期満了者、スロバキアのユダヤ人労働収容所への収容予定者などを収容していた。このセンターの建物は、かつてユダヤ人の老人ホームであった<sup>(41)</sup>。

(40) ŠA Bratislava, f. KS v Bratislave, TK VI 238/1943, Judgement of 17 May 1943.

(41) サムエル・ドヴォリーン(ホフマン)はアントン・ヴァシェック裁判でこの強制収容センターについて次のように証言している。「1942年8月末、ブラチスラバ警察本署の許可により、ユダヤ人の老人ホームに使われていた建物を警察所管のユダヤ人強制収容センターにしました。このセンターの設立は、ユダヤ人センターの社会部が行いました。この施設は、警察の拘留所や国家保安本部から釈放されたユダヤ人、ならびに刑期満了もしくは裁判待機期間の満了により地方裁判所から釈放されたユダヤ人のための中間施設でした。場合によっては、釈放されることなく強制収容所や労働収容所に移送されることになったユダヤ人のための中間施設として機能することもありました。そのような人たちは衣料品、靴、個人用品を必要としている、家族と一緒にいたいと言っている、

D. レーナルドはこのようにしてサムエル・ドヴォリーン(ホフマン)と出会い、おそらくこのセンターでD. レーナルドは証言を執筆したのであろう。このことは、D. レーナルドが自筆で書いた1943年5月26日付のS. ドヴォリーン(ホフマン)に宛てた献辞からも裏づけられる<sup>(42)</sup>。

家族共々労働センターに移送されるのは、それからだ、というのがユダヤ人センターの言い分でした。また、ユダヤ人センターは、囚人への食事が刑務所側には、余計な物入りでしかないとも主張しました。警察本署はこの主張を認めて、管理と給食にかんする一切の費用はユダヤ人センターが負担するという条件で、強制収容センターの設立を承認しました。ところが、ユダヤ人センターの幹部は、現実には時間を稼いで、ユダヤ人センターが介入するか、もしくは拘束された者の知人や協力者を動員することによって、拘束者の解放に結びつけることに関心がありました。拘束された者を救出できないときには、せめて必要物資を用意しようとも考えていました。」SNA, f. NS, Třud 17/45, Anton Vašek, Testimony of S. Hoffman.

(42) 前述したとおり、D. レーナルドは1943年2月7日にブラチスラバで逮捕された。彼がホテル・ルドルフの自室で不意を襲われて逮捕され、その後拘留されたという事実は、D. レーナルドが実際に供述書を書いた時期を確定する上で重要である。今日、手にする証言をD. レーナルドが執筆できたのは、ユダヤ人強制収容センター(ゲーリング通り)に到着してからのことであり、その文書はサムエル・ドヴォリーン(ホフマン)に手渡された——私はそのように考えている。「彼は報告書を書いてホフマンに渡した。」と、どちらかと言えば曖昧な書きかたをしている歴史学者ラディスラフ・リプチャーは、そうに違いないと考えているようである。この仮定に沿って、ドヴォリーン(ホフマン)もリプチャーには、同一の証言が2部作成されたと言っている。D. レーナルドの証言は1943年5月に書き上げられたとするのが最も可能性が高いと私は考えているが、(1942年11月よりも前ではないが)[1943年5月よりも]もう少し前に書かれ、どこかに保管され、1943年5月にD. レーナルドからS. ドヴォリーン(ホフマン)に手渡された可能性も考慮して見る必要がある。より詳しくは、MA, A. 1564. Record of the interview with Samuel Dvorin by

他の資料から、D. レーナルドは1943年6月8日にセレッジ〔ブラチスラバの東約55<sup>km</sup>〕のユダヤ人労働収容所に収監され、約1000人のユダヤ人とともに1944年2月までそこに収容されていたことが分かる。1944年2月13日、D. レーナルドはセレッジ収容所から脱走し<sup>(43)</sup>、ハンガリーを目指したが、2、3ヶ月後には舞い戻ってきた。スウェーデンにいる妹に送った1944年8月11日付の手紙(上述)の中で、D. レーナルドはジリナにいる友人の住所に宛てて手紙を送るよう頼んでいる。その中で、奥歯にものが挟まったような書きかたではあったが、自分の運命と旧ポーランド領からの逃避行のことを述べるとともに、両親が強制移送されたこともほのめかしている。そして妹にはハンガリーにいた数人の親戚の名前を挙げ、遠回しながらも、その人たちも旧ポーランド領に強制移送されたことを知らせている<sup>(44)</sup>。以上から、D. レーナルドは1944年5月に始まったハンガリーのユダヤ人の強制移送を目撃したが、それを逃れてスロバキアへの帰国を遂げたことが明らかである。スロバキアから移住した他のユダヤ人も、当時はD. レーナルドと同じようにハンガリーから逃れたのである。

1944年夏のD. レーナルドの運命は分からない。ドイツ軍によるスロバキアの占領が始まったとき、そしてスロバキア国民蜂起が勃発したとき、彼がどのような体験をしたかも不明である。D. レーナルドの足跡が再び見られるのは、国民蜂起が武力で鎮圧され、ナチスとスロバキアの協力者たちがスロバキア

のユダヤ人を根こそぎ検束しようとした1944年11月である。ドイツの計画では、逮捕したスロバキアのユダヤ人は、スロバキアから強制移送されるか、あるいはスロバキア領内で処刑されることになっていた<sup>(45)</sup>。

とうとう、D. レーナルドはナチス軍の手落ちた。彼は1944年11月23日にリプトフスキー・スヴェーテイ・ミクラージュ(現在のリプトフスキー・ミクラージュ)〔ブラチスラバの北東約270<sup>km</sup>〕で身柄を拘束され、そこからセレッジの収容所に護送された<sup>(46)</sup>。当時、この収容所はドイツ親衛隊(司令官はアロイス・ブルンナー)の管理下にあり、スロバキアからのユダヤ人の組織的移送の拠点であった。

マイダネク収容所長カール・コッホとセレッジの労働収容所長イムリヒ・ヴァシナから逃れたこの男でも、アロイス・ブルンナーからは逃れることができなかった。D. レーナルドはセレッジから移送され、1944年12月6日にザクセンハウゼン強制収容所に着いた。1944年12月14日、ナチス第三帝国最古にして最大の強制収容所の一つであったザクセンハウゼンで、D. レーナルドは、戦争末期にもかかわらず戦闘機を製造していたハインケル社で作業することになったが、その数日後の1944年12月18日、シーメンス・コンツェルンに移された<sup>(47)</sup>。

第三帝国が終焉を迎えようとしている中、D. レーナルドが収容された強制収容所は、ザ

Ladislav Lipscher, Dedication of the testimony; Cf. Hlavinka, J. “Dôjst’ silou-mocou na Slovensko a informovať”..., (“To Reach Slovakia by Force and Inform”...,) pp. 45-46 を参照。

(43) SNA, f. MV, box 573, 162-1-1944; SNA, f. MV-PT Sered’ files, card No. 1173.

(44) Letter by D. Lénard of 11 August 1944. Personal archive of Orly Anselm Peled.

(45) より詳しくは, Hlavinka, Ján and Eduard Nižňanský. *Pracovný a koncentračný tábor v Seredi 1941-1945.* (Labour and Concentration Camp in Sered’ 1941-1945.) Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, 2009 を参照。

(46) SNA, f. Koncentračný tábor v Seredi 1944-1945, Evidenčný denník. (SNA, f. Concentration camp in Sered’ 1944-1945, Registration diary.)

(47) USHMM, Häftlingspersonalkarte Dionysz Lenart, Buchenwald, 1.1.5.3./ 6471824\_0\_1 and 6471824\_0\_2 /ITS Digital Archive.

クセンハウゼンが最後の収容所ではなかった。1945年1月、彼はブーヘンヴァルト強制収容所に移送され、1月31日に到着した。彼の収容者番号は85936であった<sup>(48)</sup>。1945年2月2日、彼は、ブーヘンヴァルトの補助収容所であるオドルフ収容所に移送された。それは、ブーヘンヴァルトに基幹収容所を置く収容所複合体の中の「ブーヘンヴァルト第3特別建設事業所」(または「S3収容所」あるいは「ブーヘンヴァルト S3 収容所」とも)であった<sup>(49)</sup>。

1944年11月に設置されたオドルフ補助収容所(S3収容所)は、ゴータ市の南にあって、ブーヘンヴァルト基幹収容所までの距離は約48<sup>km</sup>である。この収容所の目的はただ一つ、ミュールベルク城[補助収容所の東約8<sup>km</sup>]の地下に司令部を建設するための奴隷労働力(囚人)を提供することであった。囚人の仕事は、城まで鉄道を敷き、ヒトラーの参謀本部を乗せた列車を隠すために、隣接する丘にトンネルを掘削することであった。そこは、ベルリンから撤退したドイツ軍参謀本部の隠れ家になるはずだった。

オドルフ収容所の収容者数は、短期間のうちに急激に増加した。1944年11月に2500人いた収容者は、その年の12月には4500人

に増え、1945年3月には1万1700人になった<sup>(50)</sup>。毎朝、点呼とみじめな食事を済ませた囚人たちは坑道に向かい、そこから発破で砕けた岩石を搬出し、さらに深く掘り進んだ。安全防護対策は施されておらず、爆風で大けがを負ったり、死亡したりすることが頻発した。作業のペースはとてつもなく早く、親衛隊員は囚人を情け容赦なく殴りつけた<sup>(51)</sup>。

病気や負傷した囚人は、オドルフ収容所の「病院」、ではなくて保健室に送られた。私が見つめることができたD.レーナルドの運命を証言する、年代記的に見ると最後に属す資料の一つは、オドルフ収容所の救急所のリストである。そこには、彼の囚人番号(85936)も記載されていて、その日付は1945年3月7日となっている<sup>(52)</sup>。

オドルフ収容所から生還し、保健室にもいたことがあるアブラム・コルンによると、その環境は「哀れな」ものであったという。保健室があったバラックは、本当は馬小屋で、窓もベッドもなかった。「私たちは、一人一枚ずつ毛布を被って土間の汚れた藁<sup>わら</sup>の上で横になりました。……囚人が死ぬと、決めて誰かがその人の毛布と食料を持っていくのです。」とコルンは証言している。病気の囚人は、ブーヘンヴァルトの基幹収容所に送られることもあった<sup>(53)</sup>。

(48) USHMM, Arrivals book (numbers) of prisoners (men) - Book 1-82, No. 1-139538, 1.1.5.1./5270224/ITS Digital Archive.

(49) USHMM, Arbeitskarte Dionysz Lenart, Buchenwald, 1.1.5.3./6471826\_0\_1 and 6471826\_0\_2/ITS Digital Archive ; D.レーナルドという名前の『作業個票』には“KDO 2/2 S3”と記載されている。これは、彼がS3収容所に2月2日に移送されたという意味である。“S3”という文言は、ブーヘンヴァルトに到着した者の『入所記録簿』にも記載されている。Glossary of Terms and Abbreviations found in the Archive of the International Tracing Service (ITS), (a version of 14 July 2015), pp. 39, 214を参照。これは、<http://itsrequest.ushmm.org/its/Glossary.pdf>でも検索可能。

(50) Megargee, Geoffrey P. et al. (eds.). *The United States Holocaust Memorial Museum encyclopaedia of camps and ghettos, 1933-1945*. Bloomington, Washington, D.C.: Indiana University Press. In association with the United States Holocaust Memorial Museum, 2009, p. 402.

(51) Ibid., p. 403.

(52) USHMM, Registry of patients in the prisoners' infirmary of the external camp detachment S III Ohrdruf, 7 March 1945, 1.1.5.1./5320599/ITS Digital Archive.

(53) Megargee, Geoffrey P. et al. (eds.). *The United States Holocaust Memorial Museum encyclopaedia of camps...*, p. 403.

作業を急がせたが、ナチスはオールドルフ収容所では建設プロジェクトを全うすることができなかった。1945年4月初め、連合国が急迫して、8000人～9000人の囚人をブーヘンヴァルトの基幹収容所とレーゲンスブルク方面に撤退させなければならなかったからである。撤退に先立って、親衛隊は歩行できない数百人の囚人を殺害した。ナチスによって銃殺された囚人もいれば、厨房バラックに入れられて施設され、爆破された囚人もいる<sup>(54)</sup>。

オールドルフ収容所とブーヘンヴァルト収容所は1945年4月にアメリカ軍によって解放された。オールドルフ収容所の解放は1945年4月4日<sup>(55)</sup>で、ブーヘンヴァルト基幹収容所は1945年4月11日である<sup>(56)</sup>。D. レーナルドが収容所の解放まで生きていたことを示す資料がある。戦後になって作成されたブーヘンヴァルト収容所生存者リストには彼の名前が載っている<sup>(57)</sup>。それは、年代記的に言えば、ジリナ出身の類い稀なこの青年の名前を記載した一番最後の文書である。これは、何十年もの間、D. レーナルドの家族だけでなく、歴史学者にも知られていなかった情報である。妹のクララ（ラケル）には、1944年8月11日付の手紙を受け取ってから2009年に亡くなるまで、ディオニュズ・レーナルドからの音信はなく、兄の運命を知ることはなかった。あの生存者リストには誤りがあるかもしれないので、D. レーナルドが生きて解放された後、病気が極度の疲労のために死

亡した可能性はある<sup>(58)</sup>。

次に、D. レーナルドが脱走後に証言した情報の性質と影響について見ることにしよう。内容的に見ると、その証言は友人に宛てた書簡の体裁をとっていて、D. レーナルドは、自分の強制移送、マイダネク<sup>あざむ</sup>収容所の状況、脱走のことを書いている。欺こうとして、「書簡」全体にたいする署名人は別人（シャーニョ）になっている。書かれた中身から判断すると、我々が入手できる膨大な日付のないこの証言は、1942年11月から1943年5月にかけて編集されたはずである。証言内容が2つの出来事に挟まれているからである。ドイツ語日刊紙『国境通信』紙に編集長フリッツ・フィアラの記事が掲載されたが、D. レーナルドは、この記事がスロバキアから移送されたユダヤ人についてスロバキア国民にたいして誤った情報を与えるとして批判している<sup>(59)</sup>。この記事の掲載が1942年11月である。他方、[モレシユ文書館に]保存されている証言には、すでに上述したユダヤ人センターの職員S. ドヴォーリン（ホフマン）にたいする献辞が書かれている。その日付は1943年5月26日である<sup>(60)</sup>。

(58) 収容所が解放され、アメリカ軍が接収してからの数ヶ月間で、ブーヘンヴァルト収容所では4700人もの囚人が、収容中に罹った重病のために死亡している。Megargee, Geoffrey P. et al. (eds.). *The United States Holocaust Memorial Museum encyclopaedia of camps...*, p. 293.

(59) この記事は3部に分かれている。第1部は1942年11月7日に、第2部は同年11月8日に、第3部は同年11月10日に掲載された。この記事が執筆された状況については、[本稿を収録した]本書[脚注(\*)参照]に収録された Michal Schvarc. Fritz Fiala. A man in the Service of Evil. In Ján Hlavinka, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25-26 August 2015)*, pp. 88ff. を参照。

(60) 証言に貼付された献辞は、ギヴァット・ハ

(54) Ibid.

(55) オールドルフでアメリカ軍が発見した殺人や犯罪の証拠は、ドワイト・D. アイゼンハワーやジョージ・S. パットンなど数人のアメリカ軍の将軍が検分した。Megargee, Geoffrey P. et al. (eds.). *The United States Holocaust Memorial Museum Encyclopaedia of Camps...*, p. 403.

(56) Ibid., p. 293.

(57) USHMM, Register of survivors in KL Buchenwald - Belgians and Czechs - (post-war compilations), 1.1.5.1./ 5355073/ITS Digital Archive.

この証言は、「5頁～6頁」というノンブルが振られている頁があることから分かるように) 明らかに原本に忠実な写本ではない。46頁立てのタイプライターで作成された証言のうち、最後の数頁が欠落しているほか、数頁が破損している<sup>(61)</sup>。

D. レーナルドの証言が、自分の目で見たことをできるだけ忠実に描写し、伝聞情報とは峻別しようとしていることは明らかである。彼の証言からは、一つの基本的な事実を導き出すことができると私は考えている。それは、D. レーナルドが目撃したのは、初期段階の犯罪であったということである。すでに述べたように、マイダネクに最初のガス室が設置される数ヶ月前、すなわち、ナチスがガスでユダヤ人を殺害する前に、彼は脱走していた。ただし、D. レーナルドは、スロバキアからの移送が死を意味するという結論に達するのに十分なものを見ていたのであって、脱走した暁には、スロバキアのユダヤ人に警告を發してやろうと決心していたことは、強調しておかなければならない。

D. レーナルドは、ガスによる大量殺戮を警告できなかった。この事実の重要性は那辺にあるのだろうか。D. レーナルドにも、そして彼が警告した人々にも、そのころはまだ加害者の本当の意図が大量虐殺であることを見抜けていなかったのかもしれない。このことは重要である。D. レーナルドの証言の影響にかんするイスラエルの歴史学者ギラ・

ファトランの見解は、次のとおりである。「東欧の状況を知らせるニュースが数ヶ月間に亘ってポツリポツリとスロバキアに流れてきたが、レーナルドの証言はそのようなニュースの謎を解く一つの手がかりであった。ポーランドでは計画的で組織的なユダヤ人の絶滅が進行していたにもかかわらず、彼の証言はブラチスラバにいた[ユダヤ人コミュニティの]幹部を納得させることができなかった。」<sup>(62)</sup> そうは言うものの、(それまで見た者は誰もいなかった) ガス室に言及していなかったからと言って、D. レーナルドの経験と情報は、スロバキアのユダヤ人を警戒させるには十分ではなかったということになるのであろうか。マイダネクでは大勢の人間が毎日死んでいるという情報は、マイダネクではガスで殺されているという情報よりも警戒レベルが低いものであろうか。歴史学者がこのような問いに最終的な答えを出すことは難しいが、問いそのものは正しい。

重要な問いは、D. レーナルドの警告(情報)はどこに宛てられたのか、それはいつ届いたか、そして、どのような影響を与えたかということである。私たちが目にしている証言をD. レーナルドが書いたのは、スロバキアに帰国してからのことであるが、残念だが、いつ、だれにたいして警告を發したかは、分からない。しかし、D. レーナルドは証言を書くよりも前に、自分の目で見たことをスロバキアのユダヤ人や非ユダヤ人(例えば、Š. ベドナール)に提供していた。これは明らかである。また、D. レーナルドは強制移送されたユダヤ人の運命と収容所について聞いたスロバキアの人々の話について、証言の中で何度か自説を述べている。Š. ベドナールの言うことが本当だとすれば、強制移送されずにスロバキアに住んでいたユダヤ人の反応に、

ヴィヴァ(イスラエル)にあるモレシエット文書館に寄託された写本だけにしか残されていない。Moreshet Archive A.1564。[このアーカイブについては <https://collections.ushmm.org/search/catalog/irn707321>, accessed on June 6, 2022 を参照。]

(61) 完全な頁数は35頁で、第36頁目はかなり破損している。落丁は37頁～42頁で、43頁と44頁の2頁が保存されている。45頁は破損していて、46頁のノンブルは45aになっている。このほか、ノンブルのない頁には、収容者数人の名前が記載されている。

(62) Fatranová, G. *Boj o prežitie*, (The Fight for Survival), p. 265.

D. レーナルドは何度も失望していた可能性が高いと言えよう。

D. レーナルドの情報はいつ、地下活動をしていたスロバキアのユダヤ人幹部に届いたのであろうか。「作業部会」と言う名のユダヤ人非合法組織が、D. レーナルドの体験を掌握したのは、いつであろうか<sup>(63)</sup>。強制移送されたスロバキアのユダヤ人の運命にかんする情報を、1942年7月に、この非合法組織「作業部会」に届けたのは、D. レーナルドである、—— スロバキアの歴史学者カタリーナ・メシュコヴァー・フラドスカー<sup>(64)</sup>は、こういう仮説を立てている。だが、私の考えでは、当面、この仮説を確証することは困難である<sup>(65)</sup>。それはなぜか。1942年7月と言えば、D. レーナルドがスロバキアに到着したばかりのころであり、彼の証言は明らかにその数ヶ月後にまとめられたからである。その上、1942年7月にD. レーナルドがギジ・フライシュマン（あるいは「作業部会」の他のメンバー）と個人的に会ったことを確認できる資料を提示している人は、カタリー

ナ・メシュコヴァー・フラドスカーはおろか、誰もいないのである。さらにまた、ベドナルの回想は、D. レーナルドがユダヤ人センターと接触したときには、どちらかと言うと冷淡に扱われたことを示唆しているということもある（繰り返すが、ベドナルの言葉では、ユダヤ人センターはD. レーナルドの話聞きたくなかったの、彼は「姿を消した」のである）。D. レーナルドは、ユダヤ人センターの非合法活動家（「作業部会」のメンバー）とは言葉を交わすことがなかったのではないか。非合法組織「作業部会」は隠密行動の集団であった（事務所のドアに看板を架けるようなことはしない）。D. レーナルドの情報は、彼本人の口からではなく、（ベドナルが言うように、D. レーナルドがギリナで非合法組織の何人かと話をしたとしても、）D. レーナルドが話をしたのあるユダヤ人を介して、何らかの方法で非合法組織のメンバーに届いた可能性がある認めざるを得ない。いずれにせよ、カタリーナ・メシュコヴァー・フラドスカーの見解は、さらなる研究を要するというのが私の考えである。

「作業部会」のメンバーの一人であったラビのアルミン・フリーダー師だけは少なくとも、今日我々が手にしているD. レーナルドの証言を読んで、自分のコメントを書き込んだことが知られている。D. レーナルドの証言の一部が、彼の日記に転載されているからである。しかし、フリーダー師はD. レーナルドの名前を記載していない。ある親族が師の日記を編集して著書にしたその中では、証言の主を「フロム川に沿った中央スロバキアのズヴェティ・クリージュ・ナド・フロム出身の無名ユダヤ人青年」と書いている<sup>(66)</sup>。それと同時に、その著書では、証言が36頁

(63) これは、スロバキアにおけるユダヤ人の非合法活動家の組織であり、そのメンバーには Michael Dov Weissmandel (ラビ)、Gisi Fleischmann, Armin Frieder (ラビ)、Andrej Steiner, Tibor Kováč, Willi Fürst, Vojtech Winterstein がいた。この組織の形成については、Fatranová, G. *Boj o prežitie*, (The Fight for Survival), p. 206 を参照。

(64) [本稿を収録した]本書[脚注(\*)参照]所載の Katarína Mešková Hradská, Attempts of the “Working Group” to Save Jews from Deportations, in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25-26 August 2015)*, pp. 78ff. を参照。

(65) Hradská, Katarína (ed). *Holokaust na Slovensku 3. Listy Gisely Fleischmannovej (1942-1944)*. (Holocaust in Slovakia 3. Letters of Gisela Fleischmann (1942-1944).) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, 2003, p. 17.

(66) Frieder, Emanuel. *To Deliver Their Souls: The Struggle of a Young Rabbi During the Holocaust*. New York: Holocaust Library, 1990, p. 95.

に及んでいるとも記載されている。この頁数は、実際にあの日記の中に記載されている数字でもある<sup>(67)</sup>。このように、フリーダー師はD.レーナルドが何者であるかを知らなかったし、おそらく証言の全文を手元におかなかったことは明らかである。フリーダー師が目を通し、控えめにコメントした36頁に亘る証言は、モーシェット文書館<sup>(68)</sup>に収蔵されている証言のより完全な36頁の写本と同一である。すでに述べたように、この証言が、1942年11月より前に書かれたはずはな

い。おそらくは1943年5月になってから作成されたものであろう。

D.レーナルドの証言を「作業部会」が知ったとしても、証言が作成されたのは1942年11月よりも前ではなかったもので、第一波の強制移送が行われていたころの活動にたいして、その証言が影響を与えることはできなかったはずである。第一波の強制移送は1942年10月20日に停止されたからである。

ギリナ出身のユダヤ人青年ディオニュズ・レーナルドの伝記は、生きる限り闘い続け、決して諦めなかつた一人の人間の物語である。この貧しいユダヤ人少年は、家族がその日の糧にも事欠く中で、当時のパレスチナにユダヤ人のための祖国を建設する夢を実現するために、そして芸術家になるために闘った。フリンカ・スロバキア人民党政権とナチズムが彼の人生と家族の生活に踏み込んできたとき、彼は自分のためだけでなく、他のユダヤ人が生き延びられるようにと、果敢に闘いを挑んだ。脱走したD.レーナルドはユダヤ人に警告を發し、そしてまた脱走した。マイダネクから脱走し、ブラチスラバの刑務所とセレッジの労働収容所を通過した。ハンガリーとの国境を行き来して、国民蜂起が鎮圧された後は地下に潜った。セレッジからザクセンハウゼンへ、そしてブーヘンヴァルトへの最後の旅も、生き延びるための偉大な闘いであった。

#### レオ(ラディスラフ)・ユンゲル

もっぱら中央法廷での証言によって歴史学者にその名を知られている「ラディスラフ・ユンゲル」という人物の本名は、レオ・ユンゲルである。「ラディスラフ・ユンゲル」という名は、第二次世界大戦後に書かれた若干の文書の中でしか見ることができない。彼は、1911年5月3日、現在、ルーマニア領になっているレペデア村〔ブラチスラバの東約650<sup>キロ</sup>〕で生まれ、同年、両親のヤクブ・ユ

(67) Yad Vashem Archives (YVA), Jerusalem, M5/193. 証言の第1頁～第35頁(さらにもう1頁)には複数の囚人の名前が書かれている。

(68) ヤド・ヴァシエム文書館に保管されているD.レーナルドの証言の断片は、何十年の間「無名のユダヤ人青年」によるとされてきた。1961年、チェコとスロバキアにおけるホロコースト研究の先駆者であるイスラエルの歴史学者リヴィア・ロートキルヒェンが、その証言のヘブライ語訳を出版した。この証言のポーランド語版も1980年に出版されたが、やはり証言の筆者は特定されていなかった。他方で、複数の研究者によって、この証言の筆者がD.レーナルドと同定された。その後、D.レーナルドの証言(モーシェット文書館所蔵の写本)については、ポーランド語版とドイツ語版が出版された。この文書のスロバキア語版は、ヴルバ=ヴェツラー記念館の研究プロジェクトの一環として刊行された拙著に収録されている。そのタイトルは“Dôjsť silou-mocou na Slovensko a informovať ....” *Dionýz Lénard a jeho útek z koncentračného tábora Majdanek..* (“To Reach Slovakia by Force and Inform ....,” *Dionýz Lénard and his escape from concentration camp Majdanek..*)である。以下を参照。Rotkirchen, Livia. *The Destruction of Slovak Jewry. A Documentary History* (hebrejsky). Jerusalem: Yad Vashem, 1961 (ただし、原文はヘブライ語); Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Gertrud Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walthter and Andreas Wirsching (eds.): *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941-1945*. München: Oldenburg Verlag, 2014, Dokument 88, pp. 309-322.



ンゲルとハナ・ユンゲルの家族は東スロバキアに移住し、その後、一家はサビノフ [レベデアの北西約 340<sup>km</sup>] に居を定めた。レオの父親は馬車追い<sup>(69)</sup>をして、妻とともにレオ他 8 人の子どもをそこで育てた。ユンゲル家は、この地の比較的貧しいユダヤ人家庭の一つであった<sup>(70)</sup>。

L. ユンゲルはサビノフの小学校に 4 年間通い、さらに公立学校に 2 年通ってから卒業して、父親の手伝をした。その後、両親は L. ユンゲルを靴職人にすることにした。彼は 1926 年～1929 年に靴作りの修業をした。サビノフで徒弟期間を満了し、ウジュホロド [サビノフの南東約 125<sup>km</sup>、現ウクライナ領] で運試しに靴職人の助手として 1932 年まで働いた。その後、徴兵でケジュマロク [サビノフの西約 65<sup>km</sup>] に行き、満期除隊後、再びサビノフに戻った<sup>(71)</sup>。

その地で L. ユンゲルは、地元の鉄道員の娘で、ユダヤ人ではない若い女性と出会った。1938 年 10 月、スロバキアでフリンカ・スロバキア人民党が政権を掌握したとき、二人の長男は生まれてまだ数ヶ月しか経っていなかった。

ユンゲル家がスロバキア新政権の反ユダヤ政策を肌で感じ始めたのは、新政権が誕生して間もない 1938 年 11 月のことである。1938 年 11 月 4 日に首相ヨゼフ・ティソの命令によりスロバキアからユダヤ人の追放が始まり、L. ユンゲルの両親とその子どもたちは出国を余儀なくされた。1938 年当時は、まだルーマニア国籍を持っていたために、強制退去の対象になったのである<sup>(72)</sup>。他の何百人

ものユダヤ人と同様に、L. ユンゲルの親族がスロバキアに帰還したのは、退去作戦が中止されてからのことだった<sup>(73)</sup>。

スロバキア国が誕生した最初の数年間における L. ユンゲルの運命について、詳しい情報はない。ただし、彼が「ユダヤ人」の定義に該当したために、政権による反ユダヤ措置の対象になったことだけは分かっている。1940 年、サビノフの官吏は、L. ユンゲルがスロバキア国籍を持っていないことに託<sup>かこつ</sup>けて、彼の生活をしにくくさせた<sup>(74)</sup>。スロバキアのユダヤ人を強制移送するための行政的な準備が始まった 1942 年には、L. ユンゲルの名前がサビノフ地方のユダヤ人名簿に「靴職人の助手」として記載されている<sup>(75)</sup>。

L. ユンゲルは、ユダヤ人の強制移送を担当するスロバキア当局が東スロバキア地方に関心を集中させていた 1942 年 5 月に、強制移送者名簿に記載されていたことになる。当時はほとんど毎日のように、内務省第 14 局の役人だけでなく、フリンカ兵や憲兵の特別部隊を指揮する将校や政権関係者からなる地方組織が、シャリシュ＝ゼブリーン県下の町からのユダヤ人移送に組織を挙げて取り組んでいた。L. ユンゲルが乗るユダヤ人の強制移送列車は、1942 年 5 月 22 日にサビノフから出発することになった。東スロバキアでの習慣どおりに、サビノフでも、強制移送の日に、フリンカ兵と憲兵が移送予定のユダヤ人を一ヶ所に集めた。L. ユンゲルはサビノフ県知事ヤーン・カプラルチークにたいして、自分を移送の対象外とするように頼んだと言われている。その数日前の 1942 年 5 月 15 日に、スロバキア共和国議会は、ユダヤ人の再

(69) ABS, KP 258/11, Biography.

(70) Wiedermanová, Oľga, Walter Frohman and Soňa Bazlerová. *Sabinov a jeho Židia*. (Sabinov and its Jews.) Prešov: DAH, 2008, p. 107; ABS, KP 258/11, Biography.

(71) ABS, KP 258/11, Questionnaire.

(72) SNA, f. Krajský úrad, box 309, 2000/1938.

(73) SNA, f. MV, box 189, List of Jews, Sabinov District.

(74) Wiedermanová, Frohman and Bazlerová. *Sabinov a jeho Židia*. (Sabinov and its Jews,) p. 43.

(75) SNA, f. MV, box 189, List of Jews, Sabinov District.

定住にかんして憲法を制定したが、その中で、「非ユダヤ人」と結婚生活を送るユダヤ人は強制移送から免除されると定められていたからである<sup>(76)</sup>。レオは、配偶者が非ユダヤ系であり、子どもたちが洗礼を受けていると訴えた。しかし、この県知事は、L. ユンゲルを強制移送の対象から外すことを拒み、L. ユンゲルの妻が懇願しても不憫とは思わなかった<sup>(77)</sup>。

L. ユンゲルは、他の約 1000 人のユダヤ人とともに、1942 年 5 月 22 日にポーランド総督府に強制移送された。移送列車はジリナ [サビノフの西約 220<sup>km</sup>] を経由し、そこで食料を積み込んでから、スロバキアを出国した。いつもの通り、ナチスは移送列車をズワルドン [ジリナの北東約 44<sup>km</sup>] で引き継いだ。1943 年春に総督府から逃亡し、スロバキアで証言した氏名不詳のサビノフ出身の別のユダヤ人がいる。その証言から、我々は強制移送の一連の経過とその他の詳細について知ることができる。その証言によれば、「国境では、ドイツの SD<sup>(78)</sup> が人数を数えて、私たちを連行しました。男性は駅で点呼され、女性は貨車の中で数えられました。旅は 2、3 日続き、私たちはレヨヴィエツ＝ルベルスキー [ワルシャワの南東約 225<sup>km</sup>] で降ろされました。旅を通して、ひどい水不足に悩まされました。水をもらったのは 2 回だけでした。食料はもらえませんでした。私たちは十分な食料を携行して乗っていました。』<sup>(79)</sup>

この列車で移送されたユダヤ人は、レヨヴィエツのゲットーに収容された。このゲットーには、ルブリン県の他のゲットーと同様

に、昔からそこに住んでいた地元のユダヤ人が収容されていたが、スロバキアからの移送列車が到着する前に、ナチスはそのほとんどを殺害していた。

前述の 1943 年のサビノフ出身のユダヤ人(氏名不詳)の証言によれば、次のとおりである。「レヨヴィエツのユダヤ人は一掃されていきました。……古くからのユダヤ人居住者でゲットーにいたのは 300 人だけでした。他には、[ボヘミア・モラヴィア] 保護領出身のユダヤ人が約 60 人と、そのころレヨヴィエツからの移送列車でやって来たニトラ(スロバキア)出身の女性が数名いました。』<sup>(80)</sup> この証人によると、サビノフからユダヤ人を乗せた移送列車が到着してから数日経って、スロバキア(ストロブコフとフメンネ)からのユダヤ人もレヨヴィエツに到着した。1942 年 5 月末から 6 月初めまでの間に、レヨヴィエツにはスロバキアのユダヤ人が約 3000 人いたのである<sup>(81)</sup>。

ルブリン県のゲットーに収容されたユダヤ人は、過密な宿舎で最小限の食料しかなく、衛生状態は劣悪だった。レヨヴィエツも同様である。上で引用した無名のユダヤ人は、レヨヴィエツでの生活状況について次のように証言している。「私たちにアパートとして割り当てられたのは、以前にユダヤ人が住んでいた住宅の一部でした。狭くて、まったく余裕はありませんでした。何せ 20 人～25 人が 3<sup>1/2</sup> × 4<sup>1/2</sup> の一部屋に住んでいたからです。8 日の間、私たちのことを気にかける人は誰もいませんでした。監視の目はありませんでしたので、想像を絶する無秩序がまかり通っていました。栄養のことを気遣ってくれる人もいませんでした。』<sup>(82)</sup> ルブリン県の他のゲットーでも、このような状況がよく見られた。

(76) Constitutional Act No. 68/1942 SL. z. *Slovenský zákonník*. (Slovak Code of Laws.)

(77) Wiedermanová, Frohman and Bazlerová. *Sabinov a jeho Židia*, (Sabinov and its Jews,) p. 43.

(78) SD は親衛隊保安部 (Sicherheitsdienst) のことである。

(79) YVA, M5/193. 氏名不詳のユダヤ人による証言。

(80) Ibid.

(81) Ibid.

(82) Ibid.

労働に出るのは、ゲッターに集住させられていたユダヤ人の一部の者だけであった。ナチスが労働を許可したのは、若くて体力のある男性に限られた。子どもが3人以上いる家庭の父親は、働くことが許されなかった。働ける者は、貧弱ではあったが、それでも少なくとも比較的普通の食事ができた<sup>(83)</sup>。

L. ユンゲルもそのような一人であった。戦後になってから、彼はレヨヴィエツでの生活状況を次のように証言している。「食事のときのコーヒーには砂糖がついていませんでした。仕事に出ると、獣脂抜き雑穀スープが出されました。」<sup>(84)</sup> 数週間の重労働の後、その時が来た。L. ユンゲルは脱走を図ったのである。きっかけは、ウクライナ国籍の、とある現場監督との会話であった。その男性は過去に土地改良工事に携わったユダヤ人に何が起こったかを暴露したのである。L. ユンゲルは次のように証言している。「私はウクライナ人の監督に、土地改良工事に携わった人々について尋ねました。監督は、ポーランドのユダヤ人が工事に当たったと言いました。そこで、そのユダヤ人たちは、今どこにいるのですかと尋ねました。すると、最初に自分たちのための穴を掘られ、盆の雀を撃たれて殺されたと言いました。私はポーランドから逃げることにしました。」<sup>(85)</sup>

5週間ほど収監されたL. ユンゲルは、レヨヴィエツ・ゲッターから脱走した。第二次世界大戦後に、彼は短めの脱出譚をわずかながら語ったり書いたりした。そのいくつかによると、L. ユンゲルは、D. レーナルドと同じように徒歩でスロバキアに向かった。東スロバキアのズボロフ [クラクフの南東約

150<sup>km</sup>、ブラチスラバの北東約 430<sup>km</sup>] の近くでスロバキアと総督府の間の国境を越えたようである<sup>(86)</sup>。

スロバキアに到着後、彼はサビノフに行き、自分の家に隠れたと言っている。しかし、彼に気づいて通報した者がいて、逮捕されジリナの強制収容センターに移送された<sup>(87)</sup>。

これについてL. ユンゲルは重要な証言をしている。彼自身の供述と他の目撃証言によると、彼はジリナの強制収容センターで、内務省第14局長のアントン・ヴァシェックから尋問されているのである。L. ユンゲルは、戦後の中央法廷のヴァシェック裁判で、ジリナでの収監とヴァシェックによる尋問について、次のように証言している。「ジリナでは5週間の間、私は他のユダヤ人から完全に隔離されていました。そのために、ポーランドでのユダヤ人への様々な仕打ちやいろいろな事柄を、ユダヤ人たちに伝えることはできませんでした。到着して5週間が経ったころ、収容所で被告人(A. ヴァシェックのこと——フラヴィンカ)を見かけました。そのときの被告人は今よりももう少し<sup>かつぶく</sup>愉快がよくて、スポーツウェアを着ていました。銃剣を突きつけて舍房から連れ出した衛兵(フリンカ兵のこと——フラヴィンカ)は、私が閣僚会議のヴァシェック氏に会いに行くことになったと教えてくれました。ジリナの収容所に着くや、ただちにすべてを取り上げられ、獄に繋がれましたが、その翌日、私は尋問され、手ひどく殴られました。ポーランドから逃れてきたからだと思います。ゴムの棍棒で殴られ、私は3回気絶しました。その都度、水を掛けられました。殴られた後、刑務所に戻されました。7月末にジリナに来て、5週

(83) Ibid.

(84) SNA, f. Národný súd, Tnľud 17/46 Anton Vašek. (SNA, f. National Court, Tnľud 17/46 Anton Vašek.) Testimony of L. Junger.

(85) Ibid.

(86) Ibid.

(87) SNA, f. Národný súd, Tnľud 17/46 Anton Vašek (SNA, f. National Court, Tnľud 17/46 Anton Vašek); ABS, KP 258/11, Questionnaire.

間収監されましたが、その間、どこにも護送されませんでした。5週間後、衛兵がやってきて、尋問のために被告「ヴァシェック」の所へ連れて行きました。強制移送されたのはいつか、ポーランドで何をしていたのか、どんな食べ物を食べたか、どのように扱われていたのかを、被告は私に問い質しました。]<sup>(88)</sup> L. ユンゲルはヴァシェックに、ゲットーの状況や集団墓地でのユダヤ人殺害を知らせてくれた監督と話したときのことを供述した<sup>(89)</sup>。中央法廷でヴァシェックは、L. ユンゲルを尋問したことはないと否認した。しかし、L. ユンゲルがヴァシェックから尋問された場に居合わせた別の証人イムリヒ・スタニェクは、尋問したことは間違いないと言下に証言し、その尋問について詳細に証言した<sup>(90)</sup>。中央法廷は、これらの証言に基づいて、ヴァシェックが1942年夏にはポーランドでユダヤ人が殺害されたことを知っていたと結論づけた<sup>(91)</sup>。なおスタニェクは、ヴァシェックが尋問した後にディーター・ヴィスリケニーもL. ユンゲルを尋問したと証言した<sup>(92)</sup>。

今となつては、ジリナで収監され、ヴァシェックに尋問された後のL. ユンゲルの運命のことを調べるのには、大変な困難が付きまとう。それにかんする資料は極めて限られているからである。しかもそれらはすべて戦

後に作成されていて、アンケートへの回答であつたり、略歴であつたりして、L. ユンゲルの生涯のいつ頃のことかについては、たいへいは簡単に触れているだけであり、日付すらないのが大半である。(おそらく正確ではないだろうが)日付が分かる唯一の資料は、L. ユンゲルがタイプライターで作成した自伝で、それには1950年7月10日という日付がある。そこにはL. ユンゲルが1942年5月22日にポーランドに強制移送されたとあり、次のような文章が続いている。「1942年8月3日に帰国した後、私は1943年まで地下に潜伏し、その後、偽造された公文書を入手して、シュピツシュカ・ノヴァー・ヴェス〔ブラチスラバの北東約330<sup>km</sup>〕にあるナハルカ靴製造会社で働いた。1943年に、その靴会社の工場で憲兵隊に逮捕された。見知らぬ一人の憲兵が私を絶滅収容所に護送することになっていたが、その目の前で逃亡した。その後、1944年まで潜伏した。1944年に山岳地帯に行き、パルチザンのキーロフ部隊に入隊した。東部戦線で……。』<sup>(93)</sup> 個人的なアンケート結果や経歴書の中には、あまり詳細でない記述が見られるだけではない。おそらくは時が経つたり、紙幅が不足したりしたからであろうか、漏れている事柄も少なくない。たとえば、1950年に行ったアンケートでは、紙幅が限られていて、L. ユンゲルは、ジリナの収容所から脱走してパルチザンに入隊したとしか回答していない<sup>(94)</sup>。

L. ユンゲルは、ジリナの収容所から脱走したのか、あるいはヴァシェックによる尋問の後に、再び移送される予定の列車から脱走したのか。このことは、様々な資料を見ても、よくは分からない<sup>(95)</sup>。

(88) SNA, f. Národný súd, Tnľud 17/46 Anton Vašek. (SNA, f. National Court, Tnľud 17/46 Anton Vašek.) Testimony of L. Junger.

(89) Ibid.

(90) SNA, f. Národný súd, Tnľud 17/46 Anton Vašek. (SNA, f. National Court, Tnľud 17/46 Anton Vašek.) Testimony of I. Staněk.

(91) Ibid.

(92) SNA, f. Národný súd, Tnľud 17/46 Anton Vašek. (SNA, f. National Court, Tnľud 17/46 Anton Vašek.) Testimony of I. Staněk. D. Wisliceny による尋問については、Wiedermanová, Frohman, and Bazlerová. *Sabinov a jeho Židia*. (Sabinov and its Jews.) p. 107 でも取り上げられている。

(93) ABS, KP 258/11, Questionnaire of 10 July 1950. Original version.

(94) ABS, KP 258/11, Questionnaire.

(95) SNA, f. Národný súd, Tnľud 17/46 Anton Vašek.

たとえ私の研究でL. ユンゲルについてのいくつかの新知見が得られることがあろうとも、1939年から1945年までの彼の人生を再構成するには、文書館をさらに詳細に調査する必要があるように思われる。1945年以降にかんして言えば、L. ユンゲルは1945年に共産党に入党したことが分かっている。解放後まもなく、彼はサビノフで、最初は貿易会社の見習いとして、後にはバター取引のための貿易証明書を取得し貿易商として働いた。戦争直後の数年間、彼は復讐法廷(A. ヴァッシュェック裁判とサビノフ県知事J. カプルラチーク裁判)に出廷して証言した。この時期の資料では、彼の名前は「ラディスラフ」である。また、彼は教育を補おうとして、公立学校で2年の課程を修了した。

2年間の貿易商の後、1949年、L. ユンゲルは商売を辞めて、倉庫の管理人になった。この年に、彼は姓を「ユネク」(レオ・ユネク)に変え、その後まもなく、国家保安部に志願して、採用された<sup>(96)</sup>。ノヴェー・メスト・ナド・メトウジー [プラハの東約140<sup>km</sup>, ブラチスラバの北約290<sup>km</sup>] の第1級養成学校を芳しくない成績で卒業し、1950年3月10日から国家保安部職員として、ブラチスラバを皮切りに、後には東スロバキアで勤務した<sup>(97)</sup>。

しかし、共産主義秘密警察でのキャリアが長く続くことはなかった。1953年初め、彼は逮捕・尋問された。そして、「シオニズム」事件との関係で彼が配下に置いていた国家保

安部の複数の秘密協力者の証言により、解職された。秘密協力者は、L. ユネクが、ユダヤ人にたいする任務を遂行しないようにと秘密協力者を説得し、国家保安部の活動の詳細を暴露して、ユダヤ人を通報した上司と協力者を批判したなどと、証言したのである。L. ユネクは、1953年、ブラチスラバ下級軍事裁判所から懲役6年の判決を受けたが、控訴した。その結果、判決の一部が取り消され、服役中の彼には「職業上の秘密を暴露した」という理由で懲役8月が言い渡された<sup>(98)</sup>。さらに、共産党の党員資格も剥奪された<sup>(99)</sup>。彼のその後の運命については、東スロバキアに住み、そこで1986年に死んだということしか分かっていない<sup>(100)</sup>。

ディオニューズ・レーナルドとレオ(ラディスラフ)・ユンゲルの二人の脱走者が、ポーランド総督府に強制移送されたスロバキアのユダヤ人殺害にかんする情報を初めてもたらしたことは、間違いない。二人の証人は、ガス室についても殺人工場についても、証言はしていない(この点で、A. ヴェツラー、R. ヴルバ、C. モロドヴィッツ、A. ロジンとは異なっている)。しかし、D. レーナルドとL. ユンゲルの二人は、4人が脱走する2年前の、まだ強制移送が続いていた時期について、かなり生き生きとした衝撃的な証言をした。ガス室にかんする情報はなかったが、二人がもたらした情報は、絶滅寸前の人々への警告であり、犯罪人を暴く役割を果たした。

(SNA, f. National Court, Tnľud 17/46 Anton Vašek..) Testimony of I. Staněk. Cf. the testimony of L. Junger and Wiedermanová, Frohman and Bazlerová. *Sabinov a jeho Židia....* (Sabinov and its Jews.)

(96) ABS, KP 258/11, Oath of a member of the National Security Corps of 16 November 1949.

(97) ABS, KP 258/11; Archiv ÚPN, Krajská správa ZNB S Štb Košice, Vyš.zvázok. archivne číslo 486. (Archive of the ÚPN, Regional Administration ZNB S Štb Košice, Higher volume. archive number 486.)

(98) A ÚPN, Krajská správa ZNB S Štb Košice, Vyš. zvázok. archivne číslo 486, Arrest warrant (A ÚPN, Regional administration ZNB S Štb Košice, Higher volume. Archive number 486, Arrest warrant); ABS. KP 258/11 HR assessment of 15 January 1953, Copy of the Sentence of the Supreme Military Court Bratislava No. T 205/53.

(99) ABS, KP 258/11. Official record.

(100) Wiedermanová, Frohman, and Bazlerová. *Sabinov a jeho Židia....* (Sabinov and its Jews...) p. 108.

## 文 献 等

### 文書館

Archív bezpečnostních složek (ABS), Prague [Security Forces Archives]  
Archív Ústavu pamäti národa (A ÚPN), Bratislava [Nation's Memories Institute Archives]  
Moreshet Archive (MA), Givat Chaviva  
Slovenský národný archív (SNA), Bratislava [Slovak National Archives]  
Štátny archív v Bratislave (ŠA Bratislava), Bratislava [State Archives in Bratislava]  
United States Holocaust Memorial Museum, Washington, D.C.  
Yad Vashem Archives (YVA), Jerusalem.

### 定期刊行物

*Slovák* [Slovak]  
*Slovenský zákonník* [Slovak Code of Laws]

### 参考文献

Bendár, Štefan. *Bohém hľadá vlasť II.* (A Bohemian Looking for a Homeland II.) Bratislava: Slovenský spisovateľ, 1984.

Bubnys, Arunas. Bataliony policji litewskiej w Lublinie (1941–1944). (Lithuanian Police Battalions in Lublin (1941–1944).) In *Zeszyty Majdanka*, (Majdanek Journal,) 2011, Vol. XXV, pp. 115–128.

Büchler, Jehošua Róbert. Deportácie Židov zo Slovenska do oblasti Lublin v Pol'sku v roku 1942. (Deportation of Jews from Slovakia to the Area of Lublin in Poland in 1942.) In *Acta Judaica Slovaca 8*, Bratislava: Slovenské národné múzeum-Múzeum židovskej kultúry, (Slovak National Museum-Museum of Jewish Culture,) 2002.

Fatranová, Gila. *Boj o prežitie.* (The Fight for Survival.) Bratislava: SNM-Múzeum židovskej kultúry, (SNM-Museum of Jewish Culture,) 2007.

Frieder, Emanuel. *To Deliver Their Souls: The Struggle of a Young Rabbi During the Holocaust.* New York: Holocaust Library, 1990.

Grudzińska, Marta. *Dionyz Lenárd. Relacja z pobytu w obozie na Majdanku (kwiecień - czerwiec 1942 roku).* (Dionyz Lenárd. An Account of his Stay in the Majdanek Camp (April-June 1942).) In *Zeszyty Majdanka*, (Majdanek Journal,) 2014, roč. XXVI, s. 181–250.

Grudzińska, Marta. Žydzi slovaccy w obozie koncentracyjnym na Majdanku. (Slovak Jews in the Concentration Camp at Majdanek.) In *Studia Żydowskie Almanach*, (Zidovski Almanac Studies,) 2014, Vol. IV, No. 4.//k

Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Gertrud Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walther and Andreas Wiesching, (eds.): *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941–1945.* München: Oldenburg Verlag, 2014.

Hlavinka, Ján. “Dôjsť silou-mocou na Slovensko a informovať ... ”: Dionýz Lenárd a jeho útek z koncentračného tábora Majdanek. (“To Reach Slovakia by Force and Inform ... ”: Dionýz Lenárd and

- his Escape from Majdanek Concentration Camp.) Bratislava: VEDA: Historický ústav SAV, (VEDA: Institute of History of Slovak Academy of Sciences,) 2015.
- Hlavinka, Ján and Eduard Nižňanský. *Pracovný a koncentračný tábor v Seredi 1941–1945*. (Labour and Concentration Camp in Sered' 1941–1945.) Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, (Holocaust Documentation Centre,) 2009.
- Hradská, Katarína (ed). *Holokaust na Slovensku 3. Listy Gisely Fleischmannovej (1942–1944). Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 3. Letters of Gisela Fleischmann (1942–1944). Documents.) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, (Milan Šimečka Foundation, Jewish Religious Community,) 2003.
- Kranz, Tomasz. Eksterminacja Żydów na Majdanku i rola obozu w realizacji “Akcji Reinhardt”. (Extermination of Jews at Majdanek and the Camp’s Role in Carrying out “Operation Reinhardt.”) In *Zeszyty Majdanka*, (Majdanek Journal,) 2003, vol. XXII, s. 16.
- Kranz, Tomasz. *Extermination of Jews at the Majdanek Concentration Camp*. Lublin: Państwowe Muzeum na Majdanku, 2007.
- Kuwałek, Robert. *Obóz zagłady w Bełżcu*. (Death Camp in Bełżec.) Lublin: Państwowe Muzeum na Majdanku, (State Museum at Majdanek,) 2010.
- Megargee, Geoffrey P. et al. (eds.). *The United States Holocaust Memorial Museum Encyclopedia of Camps and Ghettos, 1933–1945*. Bloomington, Washington, D. C.: Indiana University Press. In association with the United States Holocaust Memorial Museum, 2009.
- Rothkirchen, Livia. *The Destruction of Slovak Jewry. A Documentary History* (Hebrew). Jerusalem: Yad Vashem, 1961.
- Schelvis, Jules. *Sobibor. A History of a Nazi Death Camp*. Oxford - New York: Berg, 2007.
- Wiedermanová, Oľga, Walter Frohman and Soňa Bazlerová. In *Sabinov a jeho Židia*. (Sabinov and its Jews.) Prešov: DAH, 2008.
- Glossary of Terms and Abbreviations found in the Archive of the International Tracing Service (ITS)*, (a version of 14 July 2015). Available online: <<http://itsrequest.ushmm.org/its/Glossary.pdf>>